

◆2009年 12月

八木健選「七句」・・・（鑑賞も五七五）

- 1 秋風や動脈瘤に似たる枝（二神重則）
枝を見て人間ドッグへ行くことに
- 2 絵も文字も下手はへたなり柿の蒂（川島智子）
蒂の字を「おび」と読むなど読みも下手
- 3 鮫鯨に出刃を構えし課長補佐（小杉 隆）
臆病でなかなか課長になれません
- 4 末端よりリストラ紅葉目つ散れり（麻生やよひ）
リストラの明日は裸木てふ運め
- 5 掃除機の秋思吸い込み前進す（三橋一笑）
原因は「収支」にあるのかも知れず
- 6 蓮の実の飛びて留守の穴のあり（田中章子）
留守の穴見せる盗られるものの無く
- 7 媼にも抜かるる冬のプールかな（清水吞舟）
媼にはプール出でてでも敵わない

青山桂一
不耕起の田畑ふゑたり秋暮るる
老犬に天高くなぞこの空
渡り来し鴨も狼狽川工事

高橋 都
新走り帰つてこれぬか酔つぱらい
飛ぶ蚊をも眼に飼うてをり秋灯下
行く秋や芸名知らず木馬亭

秋月裕子
さわやかでありたいものよ一年中
里山に集つて唄うもみじかな
ゆるキャラはみんなメタボよぬくめ酒

高橋素子
何事ぞかぶさつてくる椋の声
内子座の奈落に堕ちてうそ寒し
北風の小僧を連れて冬一番

麻生やよひ
末端よりリストラ紅葉目つ散れり
「ただいま」に押つ取り刀で焼く秋刀魚
神の旅のぞみ届かぬ出雲駅

高松雄三
放屁虫の居所悪し尻の下
無農薬のレースのレタス作りけり
また来たの夫婦の仲に冬隣

足立淑子
年賀状の寅が猫より優しすぎ
右向け左だるそうな福笑い
婚活も兼ねる新年会の顔

有富洋二
駆け巡る匂い千里や煮大根
木箱より匂いはみ出て大松茸
落ち葉掃く人の頭にまた落ち葉

有吉堅二
日向ぼこ飴玉ひとつ貰ひけり
着ぶくれの我流体操猫笑ふ
一人者のまた一人来る日向ぼこ

阿部陽子
をみなへし一本も無し男郎花
登高すゴシック屋根のペしゃんこに
ヘリコプターうなりある空神の留守

安藤淑子
腰に菊纏って陶狸すまし顔
手届かぬ熟柿を鶴はうまそうに
我が人生花野のメリーゴーラウンド

飯塚ひろし
着膨れてモンロー歩きして居りぬ
落葉焚背なに来てをる人攫ひ
時雨忌やどうせ忘れる傘を持ち

井口寿々子
さよならも言はず沙羅の実落ちにけり
どんぐりの小柀にかぶるベレー帽
せせらぎも大河も同じ秋の水

井口夏子
賞受けて叩かれてある大南瓜
透きとおる葡萄は君の瞳なり
秋の山猿見てござる帰えりやんせ

無了散人
秋刀魚なりシュウトウギョに
非ず太郎どの
遠足のおにぎり小さし肥満の子
紅葉の山燃え秘湯の裸女茹だる

伊藤浩睦
白秋や肛門洗う湯を熱く
高きに登る馬鹿と煙と云はれても
大坊主の絶壁頭萩の散る

滝沢 安太郎
名月やジャパン披露目の宙の船
そばだてて情話聞きをり十三夜
素泊りの蜻蛉朝に旅立ちぬ

田代青波
捜し物何だつたかと生身魂
栗飯の栗に時々喉詰まる
蓮の実のスピルバーグの宇宙人

田中章子
運動会赤い糸ぼしのお地藏さん
月の夜の影だけ忘れ家路へと
蓮の実の飛びて留守の穴のあり

種谷良二
遅帰り食らふ夜食と大目玉
工リングで偽装完璧松茸飯
名月や一人密かに吠えてみる

田村米生
秋深き隣は夜逃げしたりけり
禁断の木の実をさがす二人かな
赤い羽根つけて駅頭闊歩する

飛田正勝
底知れぬ介護身に入む長寿かな
信濃路や米より高き十割蕎麦
一つ家の二人ぼつちに小鳥来る

戸谷笑子
減量の効き目ほのかに豊の秋
馬肥ゆるサラブレットの瘦我慢
案山子翁終日うつらうつらかな

永井一朗
大和路のどの柿食べば鐘が鳴る
老い衰し屁尿葛も臭はざり
酒温め大事にしようくされ縁

永島董玉
山彦は笑ひ上戸やましら酒
胡桃の実壺輪の口に入れたれば
十月の末の七曜使ひきる

西 をさむ
台風に進路教える気象庁
台風と予報士意見の一致する
台風の目安となりて富士の山

稲沢進一
気短な人には釣瓶落しかな
猫じゃらし鼠を捕らぬ猫ばかり
熱爛や「もう胃肝臓」と言はれたる

井野裕美
マネキンの如し衛兵汗拭かれ
月きれい月が綺麗とメール来る
退職の夫焼く秋刀魚煙たつ

今城夏枝
無花果の正体暴く二つ割り
実柘榴の実のぼろぼろん愚痴もまた
ころころ台所の里芋

越前春生
行く秋の夜の銀座に待ち惚け
こきこきと首が鳴るなり文化の日
蕎麦好きの三日続きの走り蕎麦

奥脇弘久
黄のままで生きぬく覚悟をみなへし
折り返すポイント探る秋茜
温め酒誰が人肌とほくそ笑む

笠 政人
ばつた追ふ気力脚力衰へし
鬼灯を鳴らして少女期にかへる
夕厨秋のごきぶり肥えて這ふ

可知豊親
頑として利かぬ胡桃を踏みつぶす
パソコンとパックとメール夜長妻
赤い羽根インコのそれに違ひない

加藤澄子
故郷のみやげの間引き大根葉
もう秋早秋飽きもせず生きてゐる
共に老ひし庭木の下の子栗拾ふ

加藤 賢
いたづらに熟るる棗の空深し
休耕田と言ふと雖も花野なり
一室に逢うた記憶や唐辛子

川島智子
絵も文字も下手はへたなり柿の蒂
天高し怪獣の角クレーン車
長き夜のラジオは老いの子守歌

原田 暉
受験子や戦友と云ふ参考書
凍月やムククの叫び貌となり
柿の木に熊の取り付く騒ぎかな

彦阪義久
感傷にセンチとかなふり秋深む
月光を栄養にして貝割菜
聞き耳で釣瓶落しの音を待つ

久松久子
こほろぎの雨宿りして捕まりぬ
落林檎すまなささうな貌をして
鯉跳ねて満月毀してしまひけり

日根野聖子
未完てふ果汁つまりし青蜜柑
一日の怒りほぐるる栗ご飯
実石榴の一粒づつをはずしては

広瀬遊亀男
今どきの案山子は三日天下かな
ざしき童子覗いておりぬ衣被
秋雲と相性確か双つ峯

藤岡蒼樹
十月の厨童話の油虫
飛び入りの十八番衆知の敬老日
餓鬼大将柿を頬張り見張役

藤森荘吉
露の世のモデルルームを見に行かん
こうなれば何でもありと言ふ夜長
満月や心配性の我に添ふ

藤原セツ子
秋風にやたら躓く昨日今日
満月や一人に一つ隔てなく
買い溜めの藍の端切れ夜長かな

二神重則
寒風に女神ほゝえむ宝くじ
冬来たるくしゃみ一発妻の朝
秋風や動脈瘤に似たる枝

坊野留吉
台風の進路を鞭は知つてゐる
栗は実に棘は許して店に出る
得手勝手口マン消されぬ月見酒

北村真佐子
箸の先つるんつるんと小芋かな
翳雲群団朱に染まりたる
大花野あらかた雲を吸ひ込みし

久我正明
夕焼けや自転の速さ朱を消して
噴水や落下の恐怖頂点に
金木犀花弁を開き漂いぬ

草薙一朗
少子化の国に種無し柿を売る
赤い羽根つけ一端の紳士かな
新蕎麦を喰ひそびれけりおらが旅

工藤泰子
ハロウィンの南瓜と笑顔並びけり
コスモスやコンビナートは管楽器
天網恢恢空いつぱいに翳雲

倉方 稔
北風と赤門くぐり東大出
屁にも制限有りやいも食へぬ
徒ならぬ妻の沈黙長き夜

黒澤正行
喜寿傘寿卒寿つどいて葉喰
親の屁に仔牛おどろく小春かな
長き夜兜太尿瓶を抱いて寝る

黒田忠一
栗落つる音で目覚めたホントかな？
峽畑にもんぺの似合ふ女に合ふ
紅葉風呂女一人の吐息聞く

小杉 隆
秋の雷臍のゴマとる手術前
鮫鱈に出刃を構えし課長補佐
秋深し癌来てメタボ退治せり

桜井宇久夫
カップ酒空けて秋蠅幽閉す
いまさらの恋ふとときやとろろ汁
月の宴ケータイなんぞ忘れ給へ

佐治洋一
いつの間にあなたからあなたへ翳雲
老犬と時速一キロ草の花
古書店のおやじ忙し秋時雨

前川敏夫
秋茄子や物も言ひよで毒と蜜
仏壇になにやら隠し生身魂
つんのめり威厳台なし懐手

松尾軍治
洩瓶もちゆまる音きき良夜かな
冷蔵庫生き物如く深呼吸
月の夜の女の指のありどころ

松田吉憲
世に遅れたりセーターも髪型も
走り根につまづき通し神の留守
悴みて記す句帳の誤字脱字

丸山紘一
ミンミンがジーコ制する蟬時雨
捨てぜりふ吐く人も居て秋侘し
見納めと言ひつ未練の月中天

三木蒼生
蝗虫跳ぶばつたばつたと草薙ぎて
甲板と浪のシーソー台風過
神籤てふ外交辞令うそ寒し

三塚不二
色白の脚線美人葱畑
木の葉髪この人誰と問う鏡
河岸の猫干物を脇に日向ぼこ

三橋一笑
取り敢へずむすび握りて秋の山
赤まんま炊いたら赤いまんまかな
掃除機の秋思吸い込み前進す

虫倉蝉音
父子拝す浅間小浅間初明り
あどけなき孫にも屠蘇のひとしづく
福笑ひ酒に五体の笑ふ爺

むつみ
冬めくや切符売り場の股火鉢
マスクして他人のマスク怖がれり
しがみつく石を友とす鰯かな

村上美和
一升瓶芋名月の句座に着く
夜夜の月我が家の窓より逃亡
園児らの胸に水筒小鳥来る

佐藤古城
追ひはぎはどれかと聞かれ萩の寺
臭ひくる分校長の股ひばち
故郷や鞆丸落しに首座として

佐藤義子
景色より買物ツアー旅ガラス
カバンないあわてて戻るバスの旅
誰が前白鳥の群冬告げる

佐野ゆきこ
駅前の大樹スズメのマンション
風になびくススキ銀髪の老紳士
あの咳がうるさいわねえと寝言言い

柴田真一
たそがれの糠味ソ部落に夫婦鶴
胡桃割るどの児の顔に似とるかな
芋食めば仏の腸管唸り出す

清水吞舟
媼にも抜かるる冬のブルかな
老香具師の御守挟む冬帽子
オレオレの電話もなくて蒲団干す

首藤虎男
寺の鐘余韻こもりて功德あり
松かさや艶出し色つけ生けの花
嘶家の嘶聞耳オチどこで

壽命秀次
秋の蚊のわれを選び出す妻の如
秋茄子におびき寄すらるお嫁さん
戯れ猫の尻尾太らすねこじやらし

白井道義
私利私欲捨てし晩年放屁虫
思ひ込み激しき人や蚯蚓鳴く
騎馬戦も昔の話運動会

杉村福郎
只今と目の前に来て鷓かな
疑問符の形もありし菊花展
大とろは子に食べさせず直哉の忌

鈴木和枝
歩いても座つても秋定年退職
歯医者で大口をあける退職しました
定年退職青年になれるかも

百千草
芋炊きや今日は夫恋ふ徳利酒
過ぎてより気付く幸せ草の花
秋の蝶いろはを描き中空へ

森岡香代子
雑炊の吹きこぼれみる深夜二時
群雀発つ欄干を置き去りにして
柿食ひて脳内スイッチオンとなす

森 要
遣り繰りの家計簿捲り妻栗を
天青く妻肥ゆる秋馬もまた
秋深し妻薄口に根深汁

八木 健
しわくちやを褒められてゐる干大根
初の字のついて値打ちの時雨かな
強面もイケメンのうち達磨の忌

柳澤京子
子の腹に北海道地図馬肥ゆる
死んだ蛾やだじやれの夫の一騎打ち
馬耳東風とほうよきものよ赤い羽根

山内重昭
野分はも北の田畑吹きならず
新松子ころんごろりと一輪車
あの月の裏は花野と想いたし

山下正純
秋刀魚奉行頭を採るや尾を取るや
夏ひとつ秋ひとつあり今日の朝
雑踏を一蹴するや川花火

山本あかね
神旅に虫喰ひすすむキャベツの葉
襖絵に戻りたくなき竜淵に
かじけ猫夫婦けんくわのとばつちり

山本けい子
湯上がりや言ふこと無し今日の月
狂ひ咲一度ならずも二度三度
子猫くはへし親猫の目の光る

山本 賜
メロンパン売り切れでした月の夜
ズワイガニ蒸されて赤し冬の月
少しだけ酔ひがまはつて秋の蝶

鈴木 清
ひとひらの松茸さがす土瓶蒸し
鱒雲焼いて食べたらいしかる
年の暮ナツメ口歌手のシワ深し

横山喜三郎
そこのけそこのけ運動会のビデオ撮る
案山子にも政権交代ありにけり
写真館一步も出ずに七五三

鈴木 栄
穴まどひ火の見櫓に鐘は無し
底なしの飲兵衛をとこ弁慶草
別れ蚊の鏡の中の額にあり

吉田恵子
星の飛ぶ度に数へて星の数
烏の黒のいよいよ黒き秋夕日
名月を隠さんとして雲の切れ

高田敏男
連れて行くべつたら市や親孝行
返り花老人ホームの庭に咲き
この勝負少し掛けます十三夜

吉野香風子
説教の可境に入りて調子とり
村芝居となりの風をいただいて
冬蠅の打たる為に出た様な

高田菲路
おでん炊く妻また留守をするらしく
呼出しのメール二文字や新走
どぶろくに揚がる歓声農学部

渡辺さだを
おくりびと菊はどつさり入れてやれ
バス待ちの列にキキキと朝の鵲
目刺焼く男やもめに明日あるや

高橋真紀子
あの人がある香水の香で気付く
我先に湖畔を埋めし渡り鳥
蜻蛉の眼我が全身を映したる

渡邊美代子
戦友は恋敵なり彼岸花
銀杏黄葉サラブレットの様な車夫
かけ違ひのボタンあれこれ鳥帰る